

今しかできない最光の思い出に～古都への修学旅行～

本日から家庭訪問がはじまります。よろしくお願いいたします。さて、3学年とも宿泊を伴う行事を無事に終了することができました。1年生は、「笑い楽しみ学び合い 見つけよう！最高の『絆』」のスローガンのもと、富士北麓や鳴沢村への宿泊学習を行いました。富士山の奥庭を探索したり、野外炊飯を行ったりと、中学校生活初めての校外学習に力を合わせて頑張っていました。1年生の頃から準備を進めてきた2年生は、ふるさと山梨を巡る山梨探訪を体験しました。「FUJI～学びの木に緑を实らせよう～」のスローガンのもと、1日目はクラス見学、2日目は公共交通機関を使っのグループ見学を行い、また一回り成長して帰ってきました。

そして、3年生。「楽学両道～今しかできない最光の思い出を176人で～」のスローガンのもと、奈良・京都への修学旅行を行いました。私は、3年生の修学旅行に一緒させてもらいましたが、本当に素晴らしい修学旅行を創っていました。修学旅行参加者全員が協力し合い、見事に全ての行程を充実させ、満喫し、燦然と輝く「最光」の修学旅行を創りあげていました。修学旅行期間は、天候にも恵まれ、爽やかな薫風の中、抜けるような青空のもと、日本の歴史の中心地であった奈良・京都で貴重な素晴らしい体験を行いました。また、見事な集団行動力が随所で見られました。大きな成長と笑顔あふれる修学旅行となりました。素晴らしい修学旅行にできたのは、3年生のみなさんのこれまでの準備と保護者の皆様方のご協力のお陰だと改めて感謝しています。また、3学年の先生方の事前や当日の指導や養護教諭の望月先生の尽力、添乗員さんの増員など旅行会社の方々の配慮にも感謝したいと思います。

この修学旅行を通して、3年生のみなさんは、本当に大きく成長したなと実感しています。様々な方々の思いと保護者の皆様方にも協力いただき、修学旅行ができたこと、そして旅行中も素晴らしい集団行動力で、全行程予定通りに修学旅行ができたこと、本当に素晴らしいと思いました。

私は、特に、修学旅行1日目の夜に宿舎にきていただいた薬師寺の僧侶の方の話が印象に残っています。人生を変える魔法の言葉として、様々なことは、自分自身の考え方に左右されることが多い、顔(面)を下に向けていると“面倒”と感じるけれど、頑張って顔(面)を上げるから“面白く”なっていく。他人のせいにならず、自分自身が前向きに生きていくことが大切だと教えてくれました。お釈迦様の言葉である「過去は追ってはならない、未来は待ってはならない、ただ現在の一瞬だけを、為すべき事を一心に為せ」と私たちにエールを贈ってくれました。

3年生のみなさんは、今、中学校生活の集大成の一年を過ごしています。自分自身の未来をつくるには、今という瞬間を大切に精一杯生きることが大切です。過去は変えられないけれど、今を頑張ることで未来は変えることができます。周囲への感謝の気持ちを忘れず、毎日の授業、部活動の大会、学園祭や合唱祭、そして進路選択を迎える3年生のみなさんには、今回の修学旅行で学んだ「集団としての力」を忘れずに、今を大切にしていき様々なことに、力をあわせてチャレンジして欲しいと思います。



＜生徒の感想＞

☆僕は、仲間がいることの楽しさと大切さ、またいろいろな人の支えがとてもありがたいものなのだと改めて感じた。これからの学校生活では当たり前のこと感謝しながら、苦手なことにも頑張りたいと思った。そして、楽しいと思えることは、仲間がいることによって、そして準備をしっかりすることが大切だと気づいたので、仲間のためにも一日一日を大切に過ごしたいと思った。（3年4組 水野敦喜さん）

☆この修学旅行で、京都や奈良をまわる計画をたて、自分たちで行動していくなかで、見学地の歴史や建築様式を学び、目的である深い学びにつなげることができた。これらの経験を生かし、赤学年の仲間と共に学校生活につなげていきたいと思う。（3年4組 早川多祐さん）



“朝読書”について

本校では朝の8:25～8:35まで10分間の朝読書を全校で行っています。毎朝、どの学級でも静かに朝読書から学校生活がスタートします。本当に素晴らしい取組だと思います。（1週間に1回は新聞のデジタル版を読んでいます）読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものです。山梨日日新聞にも『読書や生活習慣で子どもの成績向上』という記事がありました。なぜ「読書」が必要なのかについて、次のような文章を見つけました。紹介したいと思います。

「自分を育てる力」を読書でつける

大塚笑子（朝の読書推進協議会理事長）

「私は子供の頃から陸上が得意で、中学生の時には三種競技で全国4位になりました。将来のオリンピック候補とテレビでもチャホヤと持ち上げられていたんです。ところが、高校時代、練習で股関節を外す怪我をしてからというもの、鳴かず飛ばずの状態になってしまいました。期待されていただけに落ち込みも激しく、死にたいな、生きているのが辛いなとそればかりを考えて生きる毎日でした。実際、胃潰瘍（いかいよう）で3か月入院したこともあります。

そういう時、兄が病院に見舞いに来て、宮澤賢治の詩集と石川啄木の歌集を置いていってくれました。賢治が死にゆく妹の姿を綴った『永訣の朝』の詩と、啄木の『死ぬことを持葉のをむがごとくにも我はおもへり心いためば』の歌に触れた時、それまで死にたいと思っていた私が、『世の中にはもっと大変な人がいる』と気づかされたんです。窮地から這い上がることができたのは、そこからですね」

自らも読書で人生が変わったと語られている大塚さん。お兄さんからの「本は暇な時に読むものではない。苦しい時にこそ読むんだ。自分で自分を高めなくて誰が高めてくれる」という言葉も、深く心にとどめてこられたそうです。「私が好んで読んできたのは、山岡荘八や山本周五郎、杉本苑子の歴史小説でした。徳川家康などの主人公の生き方もそうですが、その当時必死で生きてきた女性たちに思いを馳せ、『この人たちにできて私にできないはずがない』と自身を奮い立たせてきたんです。人生というのは何かが起きても自分で立ち上がるしかありません。本は私にその力を与えてくれました」（『致知』特集「人生の法則」より一部抜粋）

